



中
古

双

葉

抄

三

~ 13
3107
3



北平

本音



双葉草書之三



北平異

郭璞山海經序一曰物自其類之世入
 よりそれと異とんといふまは天地の間の
 一むらぐ弱く居ることわかろくはと免る
 ハかろくは雨いまざり死ゆへあやな
 小て國初れ時くろや東都半出た急小河會

昭和九年
 七月二三日
 晴求

門へ13
3107
巻 3

義中より兵部卿も此人有り元来甲州の士
小して孫吳甲誠法家其奥小ゆめて窺い
ふ而かく弓矢とりてハ矢が下に解け而さ
くれも勝登るるがはるものハ霧鬼小して
夕れ煙も多くぐかりーがけ人ふと吉原計
娼婦玉河といハ名も其英人と見初め
より及ばざる恋ふんと怨一遂小病とあり
るがせめてハ其人れ其れ計ありとも見

て自ら磨んと書と志とて火て志づく玉河
が件一をハハくれども当付金盛の名街ふ
溢るゆ一英人かまを敵とて其れに觸ざり
りかゆハいよく病もかりるも其れが為ふ
位か一人れ道人のり帯に賣トして義中が
家れ新小月々畑麻と揃一徳丸の人の花生
磨真とらふかいれとつと衣倉とふ一義
中と其れ其れとらふも義中兵部卿也

義中兵部卿也



此人かまはばるく攝一くト筆の間ハ後ぞ
りーが或付道人義守か向てりよハ是下
曾とわの古今此事終ホ小ゆらうか
人か
て何とて英人とよふ入ふ多段小
ふや百乃軍いふ是れ物不使ひ一人
人とゆらうハ就のゆきとの玉と
も難うといふと世の人
る謂ハむと尺洞んどう
る

婦人今ハ何とく包まん推察の通り
娼婦をんをうけ初く瘡ひとま
く小もしてけ悉の時ひあを天下に
我印に慕ふとか一就ハくハ
バ坊へ後一とふ及人笑
さことありいでく叶一て
小咒文と書くと大ぢち
初ち細兒種れま
る

一
三

ありひらけり後が後わきけ標は貴大か
 あり四五天程小燈りて一室の雲とあり
 か不思議や其中の玉河が海ゆりりき出
 標のうへ小熱く寐入るるゆりりや義実お
 りりば撫多とおまゝあんとすまを道人押留
 先て是ハ我が招鬼の術之今はゆりりバ其人
 の命まごて移小絶ふべし先づ家に任せ給
 へ是トれ書給へ向ものゆりりバ今け火ぢら

一入強つとつふ義実と移へ玉河一や
 くと秋おささ一かのゆりりくと標冊小書
 火ぢら小入見バ其標まやりて玉河と海と
 揃ひ又えの一室の標と成り向道人が曰
 ともや是ト標人の心と英人は神魂小海で
 くり是ト今標とるかと庭面小書と玉河小
 本一強いそご吉原一徳強とつふ義実り
 曰道人の志氣れども一片の色がれをれを

社堂をよめおしとふ人志づくとあふ
 て新まうで急ぎを移ふんとむげおあさんも
 なたりの屋あつ移を重ともをくまうせん
 と雷おあう重二あれまは石と拾ひ来り
 懐よりあらぐ移のどき石ととりおし呪文
 と唱へて彼石とすりかがふお儀あつ外
 け石黄くうお重と成てうおを義宗壽美の
 おいとあしおく足下を神伝の人あつ指し

ハ何人かり傳授けりしとて同入居人が曰
 これと移まばおごととまがく足下は疾
 と療ど移しとりふ義宗大お移んでりのを重と
 判重抄西お當りて移て音おしと遊びらふ
 玉河ハ玉しをれ移移おおおありて大おを
 んくくかか忽ち英男児のあすると下し
 窺ハバ一首のあつとぞりのしと移
 玉河の海を移おかけてり

三石山記卷之三

六

人もあつとも思ふのうたは

いっお侍人ぞと同りんとすまをみ色の櫓
まなごり新も新も久くさうは強り魚や
とあふとさや懐く懐くた着れうちのあつと
バ吟どぞくはく一日二日もまら侍が或日
某れ家より玉河こねんといは侍あはらり
とて一乃扇面と持来侍同紀とまバまり
日れまおつりくはくかあるまむいまご其容

只ハ尺鉢も光おんいゆるしてりり新義
あつと道人の術とみく幾とせり無其玉河
可趣ひてあつた笑と泣びこれより志バく
言京一通ひり侍が常に居人お新てまとい
彼方より侍程お初たか川久て今も衣服入
小も美飛と極由の雷毎風の男とぞあまりり
侍人の生々おまらりりも人の歌を涙か
いとあまの初も宣ありお義手終お玉河と

古今和歌集三巻

二

うけ出さん聖と記し或時人小あつく
のよ一物後り八百両の意とぞかけ
及人及と揮く肯んぞだ一皮小二両の意
にもあバくすまバ及小きくは八百両と一
時小ゆんとい夫也一たとい及小その外
と氣色とあ小まを義中も怒り海り扱及
の意と後りいふも言ひ及たとい今ゆ
術と及く造り出たまあまといと及たといか

かたと勿解あかしく奇怪ふまど刀の柄
手と扱まバ今まが席ふ在り一道人いづく
まり一り及く一知まは義中い其也とく加
て重とゆんといま一いふまが大小後悔
道人の書、後記謝んといす及に及をわ上
く小用りりといを隣の人小及て立
まら及小が今いせんといも及く重あつねを
言及もあまといまだといくは及て及

三巻

石の及小遺いあると云揚るれど被道人が
所持せし石あり大小甚んで持入る者バク
試みれども呪文かきまを重く代せはあか
ふてもけ石れ取び得座たものあり祈を深
く祈念して人小もあさりーが或夜門と
叩く者有り後そと智むまば道人あり志不
も果てか安ふく肉一通りまをば義事も後

悔の折々冥間ふく佛の色一ん地して
に前日れ船ありーと我相謝し以後ハ深
おちんと又交とぞ結び定免々か道人の曰
是下前日拾ひあるもの何ん我小款一結
へたわくバ法ふかよかまとも三百重
と造る事くもんそふ義生んにまの心
いくふも拾ひあると好く深く交と結ぶ人
事う言とPさんと彼石と後くたれど及人

二百両むらりの加さうは石と捨ひ来る座側
小石碓の有る方に石とのせう喫文と唱へ
かに義守いそり小碓へまわり碓んとする
道人のふとひいそりておろぐうせ彼
石碓と碓りぬぐ煙に引き入る石碓の石碓忽
ち愛じて車をおろす石と投げて大小働
哭しア、我も人と知りてかゝる天刑
とわたり我り命ことしにそふありと大

小叫び悲しむる水が義守も喜ぶ後悔し自
書さんとすもハ人おし備え今足下死
たりとも我小移て益かし我小益りて志せん
とゆりつ別ふる後ゆり今け石碓我利盡に
目つむる百方あつふに石碓べし結い金
の通り玉の清かし我が為なり一手に
百人の衣食と施し世れ書し死者と救ひ給
りて是小増し功徳いかりといひておそ

消^けゆ^ゆに^に共^{とも}く^くは^は義^ぎ守^{しゅ}い^いは^はより^{より}恐^{おそ}く^くは
 ん^ん付^つて^て道^{だう}人^{にん}が^が洞^{どう}と^とち^ちり^りと^と去^そる^るを^を移^{うつ}ふ^ふ義^ぎ守^{しゅ}と
 月^{げつ}の^のを^を成^{なり}終^つして^{して}日^{にち}と^と終^つむ^むして^{して}玉^{ぎよく}河^がと^と交^ま
 か^かへ^へと^とか^かは^は再^{また}見^みえ^えと^とり^りま^ま人^{にん}終^つの^のを^をと^とり^りて^ては
 物^{もの}ひ^ひ肩^{かた}と^と並^{なら}ぶ^ぶが^がか^か者^{もの}か^から^らい^いども^{ども}余^あ原^{はら}益^{えき}て^て榮^{さか}辱^{はげ}
 と^と知^しか^かと^とう^うや^や道^{だう}人^{にん}が^が洞^{どう}と^と志^{こころ}ま^まど^どは^はふ^ふ六^む百^{ひゃく}
 人^{にん}の^の衣^い舎^{しゃ}と^と施^{たす}く^く一^{ひと}敢^あく^く驕^{おご}り^りを^を氣^きを^をた^たく^くめ
 と^と恨^{うら}み^みと^と正^{ただ}し^しと^とふ^ふ一^{ひと}と^とふ^ふが^が二^{ふた}手^ての^の後^{のち}道^{だう}人^{にん}と

り^りや^やあ^あか^か影^{かげ}を^をふ^ふく^く義^ぎ守^{しゅ}り^り定^{たく}ふ^ふ来^きり^りと^とれ^れど
 義^ぎ守^{しゅ}ま^ま姉^{あね}い^い大^{おほ}小^こ姦^{かん}び^び法^{ほう}と^とか^かが^がして^{して}昔^{むかし}の^の志^{こころ}
 と^と謝^{あや}す^すく^くも^も道^{だう}人^{にん}の^の日^{にち}は^はま^まが^が足^{あし}下^{した}に^に武^ぶ士^し
 あり^{あり}し^しも^も東^{あづま}り^りを^をあ^あら^られ^れ信^{まこと}して^{して}毒^{どく}の^の人^{にん}と
 ば^ば救^{すく}ひ^ひ終^つつ^つり^り其^{その}切^き後^ご小^こより^{より}て^てお^おが^が罪^{つみ}障^{さや}と
 く^くを^を潔^{きよ}く^くし^し今^{いま}も^も空^{そら}く^く帰^{かへ}り^り再^{また}び^び天^{てん}帝^{てい}の^の仕^{つか}へ^へ
 事^{こと}あり^{あり}ま^まい^いえ^えも^も天^{てん}帝^{てい}の^の使^{つか}ひ^ひか^かして^{して}道^{だう}化^け
 の^の補^{おぎな}佐^{すけ}と^と学^{まな}ぶ^ぶ者^{もの}あり^{あり}し^しが^が至^{いた}り^りて^て志^{こころ}り^りく^くの



手抄本

二

間人間一福あひだかんかんどくまたくり故小石を結むすんで金
 とをとかハ我われが旧時こゝろの穢けがく法は小こままくを限かぎと
 ハ踏ふべくううささ者ものなり結むすままばは後のちいいよよくく人
 とと急いそむむのの主しゅ張ちやう志しとと終しゆふふかかとといいややいいままば
 一い片ぺんのの白はく雲うん花かららりりてて舞まるるぞぞとと一い一いがが姿すがた
 ハは渡わたてて舟ふねととくくととああまま一いぞぞゆゆりりくく家いへととううや
 ままししももよよ白はく雲うん花か人ひと比ひとと雲うん人ひととと云いふふ

一、言、分、言、車、三、卷、二、

